

## 特集企画

陸上競技における体罰・暴力の課題と解決の方向性

## 序 文

昨今のスポーツ界における体罰・暴力問題が社会的な注目を浴びるなか、日本体育協会、日本オリンピック委員会等の主要スポーツ団体は「スポーツ界における暴力行為根絶宣言」（2013年4月）という決意表明をもって迅速な対応を示した。また国も機敏な対応をみせ、2013年9月には「スポーツを行う者を暴力等から守るための第三者相談・調査制度の構築に関する実践調査研究協力者会議」を設置し、同年12月にはその報告書を出した。これを受け2014年1月、日本スポーツ振興センターを中心とするスポーツ団体内に「第三者相談窓口」が開設されるに至っている。ただし、2015年になると関係諸機関の対応にも一区切りが付き、体罰・暴力問題に対する社会の喧噪もトーンダウンしたかのようにみえる。こうした一連の対応は、迅速機敏ではあっても、体罰・暴力の根本原因に踏み込むことにはならず、言わば対症療法的な処置であったことは否めない。

一方、日本体育学会もこの問題には時宜にかなって対応している。2013年1月に緊急声明を出し、同年10月より特別委員会、専門領域においてこの問題に関する検討が始まった。2015年3月、本検討作業の最終報告書が体育学研究の特集号として領域ごとにまとめられた。各専門分科会がそれぞれの学術的観点から問題の原因、所在、対策などを多角的に論じ、先の対症療法的な対応とは趣を異にした。ただし、こうした論考が実際のスポーツ現場で具体的に機能するか否かは依然未知数である。病因が明らかになっても、言わば原因療法としての効果はこれからの課題であり、同時に、学術とスポーツ現場のかかえる共通の宿題でもある。

体罰・暴力の原因の一つとしてしばしば取り上げられるのが行き過ぎた勝利至上主義である。しかし何と云っても、勝つことすなわち競技力向上は競技者、競技団体にとっての最重要課題である。つまり、競技者育成・強化には体罰・暴力のリスクが根源的につきまとい、この二律背反のなかにこそ問題解決への糸口が隠されているのではないか。

実は、上記体育学研究論文は、学術論文としてやや馴染みにくいかも知れないが、スポーツ現場で活用すべき多くのヒントが隠されている。スポーツ現場はこうした学術論文の中からのヒント探しにもっと熱心になってもよいように思えてならない。そこで本誌として、競技力向上をテーマとする競技団体の立場から、「体罰・暴力問題を考える - 陸上競技における課題と解決への方向性-」というテーマで特集を企画した。上記論文筆者のなかから、とくに幼少年期における身体活動に解決の可能性を論じた坂本拓弥氏、スポーツ科学の活用が解決につながることを論じた尾縣貢氏、そしてこの体育学会の特別企画の総括リーダーとして尽力された阿江美恵子氏の三氏に、陸上競技での応用を踏まえて改めて論文執筆を依頼した次第である。とりわけ陸上競技を指導されている先生方には、是非、競技者を育てるという身近なテーマとしてこの特集論文を読んで頂きたい。

陸上競技研究紀要編集委員会  
編集委員長 伊藤静夫

＜特集企画＞ 陸上競技における体罰・暴力の課題と解決の方向性

目 次

体罰・暴力根絶に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	36
－問題の所在と取り組み－	
阿江美恵子	
体罰・暴力を容認する身体とその変容の可能性・・・・・・・・	42
坂本拓弥	
コーチングのツールとしてのスポーツ科学の活用・・・・・・・・	46
尾縣貢	